

特集

図解 産婦人科医のための 臨床遺伝学必修知識Ⅱ

企画者のことば

末岡 浩*

医療のなかで遺伝学的情報が診断や治療選択に多く用いられるようになりました。さらに最近ではゲノム医療法が国会を通過し、いよいよ医療を行う上でも遺伝子に関する重要性が認知され、現実的に活用の方方向性が明確化されました。そのなかで、産婦人科医療においては、その役割を中心的に担う分野の一つです。日常の診療を行う上では各領域で遺伝学的検査や治療が導入され、どの産婦人科医も臨床遺伝の専門的知識が求められるようになってきました。

周産期領域は妊娠してから児に発生する疾患の診断や、母体管理に関する事例に多く接する診療部門です。生殖医療領域では遺伝病や染色体の異数性などに関して着床前診断、流産の診断など遺伝子診断の技術を求められることが多くなっています。また、腫瘍領域ではがんにかかわる遺伝子検査や分子標的治療薬の選択などに関する知識が求められることが増えてきてい

ます。遺伝子を通じてほかの疾患分野や診療科とのかかわりも発生しています。このように、これまで確定検査が病理学的診断に基づくものから、遺伝子の情報が用いられる局面も増えてきています。

これらの知識は日進月歩に進化しており、新しい知見を様々な産婦人科医が横断的に学ぶ機会が必要です。初学者にとっても急速に進む遺伝情報の詳細化と分野の拡大に対応して診療につなげることも必要になってきています。

本企画では必修知識として、ご自身の分野外の領域でもわかりやすく学べる図説の書を目指しました。内容が広範囲に及ぶため、2回に分けて出版し、今回は後半の第2部です。深い専門的知識も必要ですが、この特集は初学者や分野外の医師にも理解が深まるようにわかりやすい実務的な書として企画いたしました。本特集が実務臨床に役立つことを願っております。

* Kou Sueoka 静岡社会健康医学大学院大学(教授)、慶應義塾大学医学部臨床遺伝学センター